

明応四(1495)年「相模トラフ地震」の問題点：付・北条早雲の小田原城攻略

石橋克彦(神戸大学名誉教授)

§1. はじめに

金子(2012)は、伊東市宇佐美遺跡の津波堆積物(標高約8m)にもとづき、『鎌倉大日記』(以下KO)が記す明応四年八月十五日(1495.9.3, 以下, 当日)の地震(以下, 本地震)を、相模トラフ沿いのプレート間巨大地震だと主張した。KOの記事は1498年明応東海地震(同七年八月二十五日)の誤記とみなす見方(例えば、宇佐美・他, 2013)が根強いが、石橋・佐竹(1998)は15世紀の相模トラフ・プレート間地震の候補として1433年永享地震と本地震を挙げており、金子説は重要である。しかし問題点も少なくない。なお片桐(2014, 2018)が、史料学的精査からKOの記事の信憑性を示して、金子説を支持している。

§2. 「明応四年相模トラフ地震」説の根拠の問題点

鎌倉の地震津波災害：KOの明応四年の地震記事は【八月十五日大地震洪水、鎌倉由比浜海水到千度檀、水勢大仏殿破堂舎屋、溺死人二百余】だけである。金子(2012)は、この記事と明応六年の鎌倉の史料の考察から、本津波が10m程度で鎌倉の沖積低地の大半を被災させ、決定的に衰微させたと述べた。しかし浪川(2014)は、「千度檀」「大仏殿」や金子が用いた史料を含む当時の鎌倉の状況を詳しく検討して、金子の推定は過大だろうとしている。確かに「津波が千度檀(の南部)に達し、(現在より海側まで広がっていた)大仏寺院の堂舎を破壊した」のであれば、津波高さは4, 5mにすぎなかった可能性もある。

京都の有感記録：京都で書かれた同時代史料の『後法興院記』の当日条に「西刻地震」とある。金子(2012)は、本地震が京で有感だったのかもしれないとして、午後6時頃だった可能性が高いとした。しかし、鎌倉の強震動の時刻と地震規模が不明だから、京都の揺れが本地震によるかどうか判断できない。

江の島の地形変化：金子(2012)は鎌倉の南西方の江の島が本地震によって沈降したとし、それも本地震が相模トラフ・プレート間地震であることの証拠とした。しかし、1923・1703年は隆起であり、沈降はプレート間地震の証拠にならない(別発表のO-05参照)。

§3. 1433年永享地震との比較

石橋(1991)は、相模トラフ・プレート間巨大地震の再来時間は200～300年で、1293年正応(永仁)地震がその一つだろうと提唱したが、次の候補として永享五年(1433)九月十六日の地震が挙げられる。15世紀に二つのプレート間巨大地震が起きたとは考えにくいから、1495年明応地震の検討は1433年永享地震

とセットでおこなう必要がある(Ishibashi, 2020)。

永享地震は、本震後30余度の揺れが続いて20日ほど地震が止まなかったこと、京都でも同じ時刻にかなり揺れたこと、京都の伝聞情報では関東で堂社が顛倒して多くの死者がでたこと、相模の大山や甲府盆地北東方の被害記事もあること、津波が利根川(東京湾に注いでいた)を遡上した可能性があることなど、プレート間巨大地震らしい要件を明応四年地震よりも多く備えている。ただし、1293年正応地震と1703年元禄地震の間が、明応四年地震だと202年と208年だが、永享地震だと140年と270年になってしまう。

なお永享・明応両地震とも、それらに対比可能な津波堆積物は三浦半島南西部の小網代湾では検出されなかった(Shimazaki *et al.*, 2011)。一方藤原・上本(2018)は、同湾に近い海食洞穴遺跡で15世紀後半～16世紀と推定される津波堆積物を報告している。

§4. まとめ

宇佐美の津波堆積物とKOの記事から明応四年地震を相模トラフ・プレート間地震というのは、説得的ではない。永享地震も考えればさらに検討を要する。

考えられる可能性として、1. 鎌倉・宇佐美の地震・津波は1498年明応東海地震による(安政東海地震津波より大規模だったようだから、ありえる話)；2. 1433年永享地震が不完全な相模トラフ巨大地震で、1495年も「すべり残り」のプレート間地震；3. 鎌倉・宇佐美の地震・津波は相模湾西部の地震、などがある。

なお、宇佐美の当該「津波」堆積物は、藤原・他(2007)・金子(2012)・藤原(2015)によれば珪藻化石などの海起源の証拠が未確認だという。付近での藤原・他(2013)の追加調査もあるが、洪水や高潮の堆積物ではないのか、さらなる調査・検討が望まれる。

付・小田原「大津波」と北条早雲の小田原城攻略

伊勢宗瑞(俗に北条早雲)の小田原城攻略は明応九年頃という説が有力だったが、金子(2012)は、明応四年の大津波で小田原も壊滅したはずだから、早雲がその混乱に乗り、KOが記すように明応四年九月に侵攻したと主張した。そして、『北条記』が記す「火牛の計」は大津波のことだとした。この説は早雲研究者に支持されつつある(例えば、池上, 2017)。しかし、小田原に大津波が来襲したという文献的・物的証拠は何もない。仮に相模トラフ巨大地震が起きたとしても、1703年と1923年の小田原の津波は4m程度だったから、明応四年も壊滅的津波だった可能性は低い。金子説は慎重な再検討が必要であろう。